

『伝える力』を育む授業の創造

～主体性を促す指導の工夫～

久保寺 悠 関原 寛明 田中 陽冬

1 主題設定の理由

◆英語教育の動向から

平成25年12月、文部科学省は、2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。そこには、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として、小学校中学年はコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした活動型の外国語活動を、小学校高学年は初歩的な英語の運用能力を養う教科型の外国語教育を行い、また、中学校では授業を英語で行うことを基本とし、身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこと、高等学校では授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化させ、幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養うことが示されている。小・中・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、生徒の総合的な英語力向上を目指している。

それから後、第二期教育振興基本計画を踏まえ、文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」等を経て、平成27年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会より「論点整理」が示された。そこでは、「言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、4技能を総合的に育成すること」をねらいとした旧学習指導要領の成果と課題が挙げられている。その後、外国語ワーキンググループにおける審議を経て、平成29年3月に新学習指導要領が公示された。中学校の新学習指導要領の外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す。（1）外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけるようにする。（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」と示されており、教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱における資質・能力を育成することと整理されている。また、指標形式の目標はCEFRの枠組みを参照し、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の5つの領域において示されている。また、それらを達成するために必要となる語彙数は、旧学習指導要領に示されている1200語から、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語と示されている。現行学習指導要領の実施により、5つの領域をバランスよく指導し、外国語による総合的なコミュニケーション能力を養うことが求められるようになってきている。ちなみに、現在の第二期教育振興基本計画に掲げられている生徒の英語力の成果指標は、中学校卒業段階でCEFRのA1レベル程度以上を達成した中学生の割合を50%以上とすることとされており、第3期教育振興基本計画においては、更なる改善・充実が図られることとなっている。以上の動向を踏まえてみるに、今後の中学校英語学習者には、ある程度の語彙力と表現力を持ち、自分の伝えたいことを積極的に相手と英語を使って相互理解を図る力が求められていることが分かる。つまり、自己

のメッセージや意図を相手に的確に「伝える」力を育み、しかも、それが他者との英語によるインタラクションを通じて達成されることが求められ、教師はそれを意図的に仕組んでいくべきであると考えられる。また、外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で、言語活動に主体的に取り組むことが極めて重要な観点であるという旨が学習指導要領に明記されているように、単元や一単位時間内に生徒の主体性を促す指導を計画していくことは、言語習得において、重要な部分を示していることは明白であると考えられる。

◆これまでの研究との関連から

**H26～28 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造
～振り返りを生かす学習過程の工夫～**

『伝える力』を育む授業の創造について、「自分が表現したものを振り返ること」や「よりよい表現を模索すること」の2点から迫った。他者との交流を意図的に仕組み、深く考える授業実践を重ねたことで、①活用できる言語知識の増加、②言語機能に対する意識向上、③相手意識の高揚が成果として挙げられた。「深く考える」授業を繰り返し行っていくことで、生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとするようになり、「振り返り」を生かした学習過程を工夫することが『伝える力』を育む授業を創ることにつながるということが明らかになった。そうした教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては、既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等、本校英語科が期待する生徒の姿が見られた。しかし一方で、生徒自らが言語知識を増やそうとしたり、言いたいことと言えことのギャップを感じたときに、もっている知識を活用して伝えようとしたりする姿勢に課題があると考えられた。

**H29～R1 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造
～対話的な学習活動の工夫～**

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを通して『伝える力』を育み、それを見取することを主たるねらいとし、対話的な学習活動を工夫することが効果的に資質・能力を育成することにつながるという仮説のもとに研究を進めた。『伝える力』を育む上で、「見方・考え方」を働かせた深い学びは必要不可欠であり、対話的な学習活動を充実させることが、生徒の深い思考を促し、質の高いアウトプットにつながるということが明らかとなった。指導者が、評価は指導の一環であるという認識をもち、評価を指導計画の中に位置づけて適時組み込むことで、評価を指導に生かすことが可能となり、「指導と評価の一体化」は具現化されることも示された。

**R2～R3 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造
～主体性を促す対話的な学習活動の工夫～**

前年度までの研究を継続、発展させ、生徒の「主体的な学び」を実現する指導の在り方について迫った。生徒の「主体性」を促すためには、「対話的な学習活動」を充実させ、教師の適切なフィードバックや『主体的な学び』のプロセスモデルを意図的に単元計画や一単位時間内に位置付けて授業実践することが有効であることが明らかになった。また、ICTの活用が学習指導の幅を広げ、多様化する生徒のニーズに応える授業実現の可能性を見出すことができた。

◆生徒の実態から

本校には、単語や表現などの知識を豊富にもっており、大きな抵抗を感じることなくまとまった文章を書いたり、質問に対して適切に応じたりする力を備えている生徒が多くいる。また、学習に対して前向きで、授業に真面目に取り組む姿が大半の生徒において見られる。その一方で、自由な発想でものごとを考えたり、与えられた課題以外においては、自分から積極的に英語を使って情報を発信したりすることを苦手としている生徒も多い。また、授業で学んだ内容を深めたり、自身の英語表現の幅を広げようとしたりして、授業以外の場面で自主的に英語学習に取り組む意欲は低い

と考えられる。外国語教育においてコミュニケーション能力を養うことは目標の中核を成しており、「話すこと」や「書くこと」などの言語活動の充実と技能の育成は新学習指導要領においても課題であると認められているため、改善を図る必要があると考える。また、政治や外交、歴史、文化、環境、医療、科学技術など多方面にわたる話題に興味関心を示す生徒が多いが、直面しているまたは直面するであろうと予想される課題について、解決策を見出し、自分から行動を起こそうとする意識は低いと思われる。興味関心に基づいて得た多くの知識を活用し、課題を解決する方策等について自ら思いを巡らす姿を本校英語科では目指したい。そうした姿は、他者や社会に貢献しようとする意識の芽生えにもつながり、生徒の生き方のありようにも関わると考える。以上を踏まえた時、身近で日常的な話題だけでなく社会的な話題も含めて、様々な情報について読んだり聞いたりした上で、課題解決を踏まえた自分の考えや意見、情報等を「伝え合う」学習活動を充実させ、それに主体的に取り組もうとする姿勢を持たせるための仕組みを作ったり、表現できたこととできなかったこと及びその理由について振り返らせる経験を積ませたりすることで、自分たちの未来に能動的に関わろうとする姿勢や他者と協働して未来を創っていくために必要とされるコミュニケーション能力が養われていくと考える。

◆『伝える力』の定義について

ここで、本研究主題のキーワードの1つである『伝える力』について、我々にとっての意味を定義しておきたい。現行学習指導要領において「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーション」が目標に掲げられており、それを支える資質・能力と『伝える力』は重なる部分が多い。コミュニケーションを実現させる際には、その原動力となる「伝えたい」という意欲や積極性、さらには、目的や方略選択につながる「いつ」「どこで」「誰に」「何を」伝えるのかという意識を持つことは重要であると考えられる。本校英語科は『伝える力』を次の通りに定義し、さらに現行学習指導要領のねらいに沿う形で研究を進める。

本校英語科が考える『伝える力』の定義とは、「自分の考えや意見、情報等を、聞き手や読み手に配慮し、自ら進んで、目的や場面、状況に応じて身の丈に合った英語を常に更新させながら用いて、伝え合うことができる力」である。

2 研究の目的

『伝える力』を育むために、「創造性」を發揮させながら学習に取り組む生徒の育成を通して、「主体性」を促す指導の在り方について明らかにする。

3 研究内容（全体研究との関わり）

令和4年度から全体研究では「新たな価値を創造する生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした実践を通して～」という主題を設定し、3年計画で研究を行っており、今年度は3年目の研究となる。「『主体的な学び』のプロセスモデル」と、「創造性」の2つをキーワードに据え、生徒自身によるプロセスモデルの実践と、思考力、判断力、表現力を高めるための手立てについて研究を深めていく。

本校英語科においては、『伝える力』を育むためには、対話的な学習活動を通じた「見方・考え方」を働かせた学びが必要不可欠であるという、これまでの研究成果における認識のもと、本校生徒の課題でもある、「主体性」に重きを置いた研究を進める。以下、教科研究のキーワードでもある「見方・考え方」、「主体性」、「創造性」などの意味に触れながら、全体研究と教科研究の関わりについて述べる。

(1) 英語科における「見方・考え方」について

「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて」（平成28年8月）では、「社会や世界との関わりの中で、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、外国語を聞いたり読んだりすることを通じて様々な事象等を捉え、多様な人との対話の中で、情報や考えなどを外国語

で話したり書いたりして表現して伝え合うことで思考していくことが重要である。」としており、また、「このような学習過程を通じて、学ぶことの意味や自分の生活、人生や社会の在り方に主体的に結び付けたりする学びが実現されることによって、学校で学ぶ内容が、生きて働く知識や力として育まれることになる。こうした学びの過程が外国語教育の『主体的・対話的で深い学び』であり、その鍵となるものが、教科等の特質に応じた『見方・考え方』であると考えられる。」としている。さらに、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）（以下、「中教審答申」）では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と整理している。本校英語科は、生徒に、以上に述べた外国語科としての「見方・考え方」を働かせた学習活動を積み重ねさせていくことによって『伝える力』を育むことができるという考えのもと、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を次のようにとらえる。

本校英語科が考える「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「生徒が自ら進んで英語で表現し伝え合うため、言語や文化を、自身の経験則や背景知識と照らし合わせながら、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて自分の考えや意見、情報等を形成、整理、再構築すること」である。

我々が育みたい「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の具体的なものとしては、例えば、人物を紹介する活動においては、「相手との関係を踏まえ、紹介する目的に応じて人物の情報等を整理及び取捨選択し、相手の興味関心に応じて話題を膨らませるなどして文章を組み立てること」である。また、議論の活動において育みたい「見方・考え方」とは、「議論すべき話題の背景や現状などを踏まえ、さまざまな立場や捉え方があることを認めつつ、自分の考えを伝え、相手を説得するために、集めた情報を整理しながら、伝えたいことが伝わるように、時には他者の目を借りながら、試行錯誤して自分の意見をまとめていくこと」である。

「教科等の特質に応じた『見方・考え方』」は「主体的・対話的で深い学び」の鍵となっており、中教審答申では、「『主体的・対話的で深い学び』の実現」を「学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」と整理している。また、「深い学び」を「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう」と整理している。つまり、「見方・考え方」を働かせた「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、後述する生徒の「主体性」を促すことに直結し、「創造性」を発揮させながら学習に取り組む生徒の育成も可能になると考えられる。そこには、本校英語科が目指す『伝える力』を育む上で、重要な要素が含まれていると言えるだろう。

（2）本校英語科における「主体性」について

これまでの研究から、「見方・考え方」を働かせた学びを実現させるための手立てには、生徒の様々な「主体性」を引き出す可能性があることを見出してきた。例えば、目標を確認し授業計画を示して見通しを持たせることで、生徒は自ら進んで活動に取り組み、課題解決に向かうようになる。また、生徒の既有知識を経験則や背景知識と照らし合わせて考えさせる教師の発問づくりによって、生徒は知的好奇心や知的欲求を原動力として未知なるものごとに意味づけをしながら学びを進める。さらに、単元を貫く問いについて様々な視点から思いを巡らせる経験を通して、生徒は社会や世界、他者と自分との関わりについて考えるようになる。パフォーマンス課題においては、実際的で実践的な目的、場面、状況を設定することで、生徒は具体的な相手意識を持って表現活動に取り組むようになり、実生活に応じた適切な英語表現を使用した言語活動を実現させると期待される。また、学習過程の適切な振り返りを通して、自身の学びの成果を自覚させ、現状における『伝える力』を客観視するとともに、その後の学習における方向づけや動機づけがなされることが

期待される。そうした新たな学習に向かう姿勢は、授業だけに留まることなく自らの興味関心に応じた英語学習を進展させたり、生涯において能動的に学習に取り組んだりすることにつながると考える。以上のことを踏まえ、本校英語科が考える「主体性」を持って学ぶ生徒を以下の通りに定義する。

本校英語科が考える「『主体性』を持って学ぶ生徒」とは、「言語や言語活動に興味や関心を持ち、自らの目標や課題解決に向けて、振り返りなどを通して自己調整をしながら粘り強く課題に取り組む、自身の『伝える力』を高めようと努める生徒」である。

(3) 本校英語科における「創造性」について

先述したように、本校英語科は、「見方・考え方」を働かせた学びを実現することは、生徒の「主体性」を促すことにつながり、「創造性」を發揮させながら学習に取り組む生徒の育成も可能にすると考える。全体研究では、「創造性」を發揮することを、「自ら課題を見出し、その課題に関わる事象について自分なりに新たな意味や考え方を見出すことで解決すること」としている。また、そうした過程を経て見出された「新たな意味や考え方」は、「新たな価値」をもつものであり、自分自身や周囲の人々の人生や社会全体をより豊かにするものでもありとしている。こうした「創造性」の捉えを受け、英語科では、「創造性」を發揮させながら学習に取り組む生徒を次のように定義する。

本校英語科が考える「『創造性』を發揮させながら学習に取り組む生徒」とは、「自らの目標をもち、課題を認識した上で、それを解決するために既習事項や背景知識、経験則などを新たな言語材料や英語表現と結びつけながら活用して試行錯誤を繰り返し、学習の成果を踏まえて新たな学習へとつながりをもたせて学び続ける生徒」である。

また、全体研究では、育もうとする「創造性」をより明確にするために、資質・能力の3つの柱に沿って整理している。その中でも「思考力、判断力、表現力等」に着目し、「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」の育成のための手立てについて研究を進めていく。英語科としての「思考力、判断力、表現力等」における「創造性」とは次の通りである。

本校英語科における「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」とは、「既習事項や背景知識、経験則などを新たな言語材料や英語表現と結びつけながら活用して試行錯誤を繰り返し、学習の成果を踏まえて新たな学習へとつながりをもたせる力」である。

現行学習指導要領では、「様々な人々との対話の中で、目的や場面、状況等に応じて、既習のものも含めて習得した概念（知識）を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見出して解決策を考えたり、身につけた思考力を發揮させたりすること」が重要だということを示しており、本校英語科では、まとまりのある英文や生身の人間から得た情報をもとに、自分の意見や考えなどを持ち、地域課題や身近な生活上の課題を解決するための最適解を見いだして、相手に伝えるまたは発信することを生徒に多く経験させたいとも考える。この際、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」が發揮され、既有的知識を繋ぎ合わせて地域（あるいは社会の）課題や身近な生活上の課題を自分なりに解決し、自他の人生や生活を豊かなものとしていく工夫がなされていくことが期待される。こうした学習過程を経て「新たな価値」が生まれ、「創造性」を發揮させながら学習に取り組む生徒を育成することが実現され、『伝える力』を備えた生徒の育成につなげることができると考えられる。

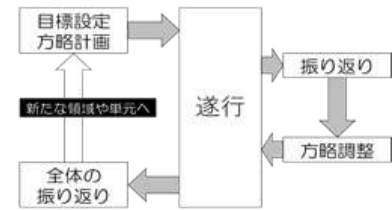
4 研究仮説

「創造性」を發揮させながら学習に取り組ませることにより、生徒の「主体性」を促し、効果的に『伝える力』を育むことができるだろう。

5 研究を支える取り組みとして

○生徒自身が有用性を感じる「主体的な学びのプロセスモデル」の実¹ 図1「主体的な学びのプロセスモデル」

昨年度までの研究で取り組んできた「主体的な学びのプロセスモデル」を単元または一単位時間内に位置付けて、計画的に実践することにする。「主体的な学びのプロセスモデル」を用いることで、生徒の「主体性」を促す指導が可能となり、「主体的な学び」が実現することが昨年度までの研究で示された。今年度の研究では、生徒の「主体性」を発展させ、昨年度以上に充実させる



ことをねらいとしている。予測困難な時代に生きる生徒たちに、未知なるものに対応できる力を身につけさせるためにも、自ら課題を発見し、自ら考え、自ら解決する経験を積ませる必要性を強く感じる。本校の全体研究で示された「主体的な学びのプロセスモデル」は、①目標設定・方略計画、②遂行、③振り返り、④方略調整、⑤遂行、（振り返り、方略調整）⑥全体の振り返り、で構成されており、自ら学習の方向づけをしたり調整をしたりしながら学びを進める流れを示している。（図1）

この流れは、言語習得のサイクルにも重なる部分が多い。言語の習得を目指す英語科においては、親和性が高いとも言える。授業展開の中に、この「主体的な学びのプロセスモデル」を自然な形で組み込み、あたかも生徒自身が自らの手で学習を進めているかのように授業実践をすることで、生徒たちは、自らの目標をもち、調整をしながら試行錯誤を繰り返し、学習の成果を踏まえて新たな学習へとつながりをもたせて学び続けることができるようになることを考える。また、「学習方略」の言語化によって生徒自身が自らの学びをモニターしたり調整したりできるようになることを目指したい。「主体的な学びのプロセスモデル」を用いる際、「学習方略」をスキルとして伝えることを意識し、生徒と共有することで主体的な学びが実現することを狙う。また、生徒同士がワークシートや振り返りシート等を通じて、例えば活動の中で発した英語を共有したり、活動を振り返ったコメントなどを共有したりすることも、次への学習方略へとつながると考え、指導を行いたい。

○既習を結びつける指導の工夫

「創造性」を発揮させながら学習に取り組むためには、「主体的な学びのプロセスモデル」の流れを意識した授業構成が有効であることは前にも述べたが、既習事項や背景知識、経験則などを新たな言語材料や英語表現と結びつけながら活用することは欠かせない。そのためには、発問や振り返りが重要であると考え。発問や、単元末の振り返り、あるいは言語活動後の振り返りを通して、何を知っていて、何を知らないのか、といったことを学習者に自覚させることをはじめとし、すでに知っていることを新たに知ったこととどのように結びつけるのかということについても学ばせる必要がある。また、課題解決のために活用できそうな既習事項を想起させ、発展・充実させることにより自身の「伝える力」に広がりや深まりを持たせる授業展開を目指したい。そうした経験を重ねさせることにより、既習事項を足がかりとして新たな課題を解決する糸口を自ら見出し、課題解決に能動的に関わっていくことのできる生徒の育成が可能になると考える。

○パフォーマンス課題設定の工夫

生徒が自ら課題を見出し、学習調整をし、学習の成果を振り返る際、よりどころになるものはタスクとゴールイメージであると考え。また、「伝える力」を育むためには「見方・考え方」を働かせた学びが必要不可欠であり、生徒には常に「見方・考え方」を意識させて学習活動に取り組ませたい。パフォーマンス課題における目的・場面・状況を、生徒にとって身近なものや実際の言語使用場面を想定したものに近づけることにより、目標となるタスクのゴールイメージが明確となり、振り返りも具体的になることが期待される。それに伴い、パフォーマンス課題で用いられる英語には生徒の「見方・考え方」が色濃く反映するようになることを考える。また、明確な評価規準を生

徒に示すと共に、B評価の具体的な姿を示したい。その際は、単元間のつながりをできるだけ意識し、次の単元へと進むごとに、生徒の伝える力が高まっていくことを目指したい。

6 参考文献

- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年）
- 文部科学省 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）
- 文部科学省 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年）
- 文部科学省教育課程企画特別部会 論点整理（平成27年）
- 文部科学省教育課程部会 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（平成28年）
- 文部科学省教育課程部会 外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年）
- 文部科学省中央教育審議会 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要（平成23～27年度）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（平成28年度～令和3年度）
- 田中博之 「アクティブ・ラーニングの学習評価」（2017, 学陽書房）
- 管 正隆「中学校教育課程実践講座 外国語」（2017, ぎょうせい）
- 文部科学省教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）（平成31年）
- 文部科学省 Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～（平成30年）
- OECD THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS Education2030 (2018)
- 国立教育政策研究所 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（令和2年）
- 文部科学省中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子どもたちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～（答申）（令和3年）